

安部公房「洪水」論

——人間液化とその寓意——

一、はじめに

「洪水」は「人間」一九五〇年二月に「赤い薔」魔法のチョークと共に「三つの寓話」の総題で発表された、初出誌で三頁ほどの短編である。一九五一年五月、月曜書房より刊行された作品集「壁」に収録されている。河川の氾濫などによる自然災害の洪水とは異なり、本作品では人々の液化によって洪水が発生する。突如液化した労働者を皮切りに、工場の労働者や刑務所の囚人たち、農民などが相次いで液化し、水に関わる様々な異常や洪水を引き起こす。人々の液化は止まらず、液化しなかった人々を溺死させていった。液体人間の洪水から逃れた「富める人々」は労働者を動員し堤防を建設するが、液化と洪水は止まることがなく人類は滅亡してしまふ、という一連の様子が描かれている。

本作品は「労働者や貧しい者たち」が液化し「富める人々」を脅かす点などから、階級の問題が看取され、先行研究の多くが共産主義との関わりを論じている。北村耕は「労働者のエネルギーが、洪水のような力になることへの、期待がこめられていた」と論じる。田中裕之は「洪水」に前後する時期の作品やそれ以後の作品も水のイメージの類似から、「水のイメージが再生や変革と結びついてい

胸組 芙佐子

ること指摘する。さらに、一九四八年一月六日に米陸軍長官ロイヤルが出した、日本を極東における反共の防波堤とする声明を前提として、安部が「その〈反共の防波堤〉をものともせず乗り越えていく共産化の波を期待」して液体人間が発想された²⁾と論じている。安部公房の諸作品における水の表象に着目して論じた李先胤は、階級の問題が描かれていることに触れ、「洪水」における水が「生と死をめぐる暴力の場」であり「歴史の転換期における暴力の表象」であると指摘している。田中や李が指摘する水の象徴的使用は、作家論的視点をもとにした解釈であると言えよう。一方で共産主義以外の観点からは、同時代評では「三つの寓話」における感覚やデフォルメ、文章法を評価しながらも「洪水」の人間液化を「画一化」「近代文明への痛烈な諷刺」と解釈している。渡辺広士は「古い人間全体が変形し滅亡したあとに新しい人間の結晶が見られるだろうと語る」と解釈し、「安部公房がこれらを書くことによって見出したのは、ファンタジーの楽しみだった」と論じている。この渡辺の論は、本作品の寓話性や寓意に対する評価というよりは、「変形」という方法のファンタジー性を指摘するものである。本作品が「三つの寓話」として発表されたことを考えれば、渡辺の解釈以上に寓話として描かれた内容に着目する必要があるだろう。

北村や渡辺の論を受けて玉川晶子は「身分・階級の表現がある」と認めたくて、液化した人や溺死した人の全てを労働者と資本家に分類できないことから、共産主義の観点による解釈に疑問を投げかけている⁽⁵⁾。玉川は液化する人を「社会的弱者」、溺死する人を「社会的強者」と位置づけ、「洪水」における安部の思想が「コミュニケーション・マルキシズムを土台としながら、更にそれを発展させた独自のもの」であると指摘する。さらに『旧約聖書』との関連から「洪水」が浄化の役割を持つと解釈し、「社会の常識や秩序を破壊させ」、「人間の存在を根本から変えてしまうような変化が、新たな社会を構築するために必要なのだ」という安部の社会に対する理想を読み取っている。

以上のように、共産主義的な階級の問題や液体人間による「洪水」の寓意が先行論で問題とされてきた。確かに、液化する貧しい人々と堤防を築き最後には溺死する富める人々との対比から、階級の問題が描かれていることが認められる。しかし玉川が指摘しているように、液化と溺死した人々すべてを階級の問題にあてはめて理解することは難しい。また、洪水の寓意を問題にするあまり、なぜ人々が液化し多様な性質を持つ液体人間となるのか、この液体人間が洪水を起こし人々を溺死させる以外にも様々な行動をとるのはなぜかといった部分は、洪水や水のイメージに結び付けて語られる一方で、その理由が看過されているのではないだろうか。先行論の多くは人々の液化を物質としての液体になったものとして扱うが、「液体人間」という言葉を見ると、彼らは液化した人間として描かれていると考えられる。さらに、液体という性質上、液体人間による洪

水を含めた様々な運動が、画一化された液体すなわち溶け合い同化することで個々の区別がなくなった物質としての液体によるものなのか、個々に異なる個別の液体人間たちの集まりによって形成された集団によるものなのかを考える必要があるだろう。液体人間の集まりがどちらの性質のものであるかによって、洪水の意味合いが変わってくる。このように、本作品の寓意を読み解くには、洪水のみでなく人々の液化や液体人間の性質にも焦点をあてて考えなければならない。また、本作品の共産主義的な寓意は、安部の共産党への接近との関連の中で読み取られているが、安部が戦後の当時に本作品を描いた必然性、すなわち「洪水」の戦後性も、見落とすべきではないと考える。本稿では、液化の様子や液体人間の特徴を確認しながら、本作品と戦後的な背景との関わりを考察していきたい。

二、液化と液体人間の性質

最初に液化した労働者の様子は、「宇宙の法則をさぐるために」天体観測をしていた哲学者によって目撃された。何気なく地上に向けた望遠鏡を通して労働者を発見した哲学者は、「疲労のほかに頭の中はからっぽ」な労働者を観察していく。

不意に体の輪郭が不明瞭になり、足のほうからとろけ、へなへなとうずくまり、服と帽子と靴だけを残してぼつりとした粘液のかたまりになり、最後に完全な液体に変わって平たく地面に拡がった。

液化した労働者は静かに低い方に流れはじめた。道のくぼみ

に流れ込んだ。それから逼り出した。この流体力学の法則に反した液体労働者の運動は、手にしていた望遠鏡をあやうく取り落しさうになつたほど、哲学者を驚かせた。更に流れて、道端の塀におつつかると、まるで被膜をもつた生物のように逼り上つて、塀を乗り越し視野を去つた。

液化した労働者は一度入ったくぼみから這い出し、塀を這い上るといふ「流体力学の法則に反した」様子を見せている。この後、哲学者は「世界に向つて大洪水の到来を予言」する。目撃した労働者の液化と同じ現象が、他の場所でも起こると察知したためであろう。なぜ哲学者は大洪水の到来を予言することができたのだろうか。それは哲学者が「宇宙の法則をさぐる」人物であることが関係していると考えられる。哲学者による天体観測は「いつものように」行われているのだが、望遠鏡を通して観察することが「宇宙の法則をさぐる」行為であることがわかる。言い換えれば、望遠鏡を通して観察されたものは、哲学者によつてその法則をさぐられている。このような方法で法則をさぐる哲学者によつて観察された労働者の液化は、目撃されると同時に、なぜ、どうやって液化するのかという法則をさぐられていた。そのために、哲学者は「重い吐息」をつくほどの大洪水の到来を予期し、予言することができたのである。さらに哲学者という立場も、洪水の到来を予言する一助となつたと考えられる。後述するように、物理学者たちは液体人間を科学的法則で理解することができず、社会問題などを伝える新聞も洪水の「本質的な原因」を掴むことができない。この「本質的な原因」が哲学的な問題であつたために哲学者が大洪水の到来を予見できたと考え

られる。

哲学者の予言通り、いたるところで「労働者や貧しいものたちの液化」が発生していた。特に取り上げられている液化は集団的な液化だが、人間液化によつて生まれた液体は、「物理学者たちを混乱におとし入れる」ような性質を有していた。この性質を詳細に見ていこう。

警察では秘密裡に物理学者たちを動員し、その水の性質の究明にあつた。しかしその液体は完全に流体の科学的法則を無視して、物理学者たちをいたずらな混乱におとし入れるだけであつた。手にふれてみれば普通の水と少しも違わないのに、時によつては水銀のように強い表面張力を示し、アメーバのように自分自身の輪郭をたもつことができたので、さきにしるしたように単に低いところから高いところに逼り上ることができらばかりでなく、液体人間同志や、他の天然の液体の中に一度完全に混和したあと、何かのはずみにまた元どおりの量をたもつて分離してきたりするのだつた。また逆に、アルコールのように弱い表面張力を示すときもあつた。そんなときにはすべての固体に対し異常に強い浸透力を示した。すなわち同質の紙に対しても、時によつて、多分その用途の相違などに応じて、まるで無反応であつたり化学薬品のような融解力をもつたりした。

液体人間はさらに「氷点や気化点はまちまち」であることが描かれる。李先胤はこの液体を、水と同じものとしうて、過冷却や準安定状態など「状態によつてわずかな刺激でもダイナミックな構造相転換を見せる」として、多様に変化する水の表象と指摘する

が、この液体が有する性質は水のそれを越えたものである。水に似た、しかし水ではない新たな液体の出現が描かれていると考えるのが妥当であろう。新たな液体が出現したことは、物理学者たちの混乱からもわかる。警察によって集められた物理学者たちは、この液体人間の性質によって「いたずらな混乱」に陥ってしまう。同時代評では「いたずらな混乱」の原因を「低い方から高い方へ逆流する不思議な液体の出現を指して言つたもの」とし、これが液体ヘリウムⅡと同様の性質であることから、物理学者が混乱に陥つたりはしなないと苦言を呈している。確かに当時の辞典を見ても、液体ヘリウムⅡに容器の壁を上る性質があるという記述が確認できる。しかし、物理学者たちが「混乱」した原因は「低い方から高い方へ」という性質だけではない。水銀のような表面張力やアメーバーのように輪郭を有する一方でアルコールのような表面張力を示し浸透力があるという性質をあわせ持ち、それらの性質が法則性なく「時によつて」現れるという液体の性質によるもので、これまでの法則の埒外であることに對する「混乱」であることが本文から読み取れる。このような性質から、液体人間は水に関わる様々なものを混乱におとしされるのである。

人々の液化は、不思議な性質をもつ液体の出現だけではなく、水に関わる様々なものに影響を与えていた。スケート競走の先頭を走っていた選手が姿を消したり、プールで泳いでいた娘たちが中に閉じこめられたりと、水に関わるスポーツや遊びに影響が及んでいる。また、化学実験が不可能になり、蒸気機関車が使えなくなるといった問題の他に、「水に大きな関係をもつ魚類や植物は言語に絶した

混乱ぶり」として、「歌をうたつてこげまわるリンゴ」や「花火のように音を立てて破裂する稲の穂」が描かれている。玉川によって指摘されているように、これらは液体人間によって常識や秩序が崩壊していく様子である。液体人間の出現によって、液体の性質に関する常識や化学や物理、生物学などで把握されていた自然の法則は破壊されてしまう。ここで注目したいのは、液体人間の行動が多岐にわたるといふ点である。作品の結末で液体人間たちの活動は停止するが、停止するまでの間になぜ液体人間がこのような行動をとるのか、その行動の意思決定が個々の液体人間によるものか、そうでないかを見極める必要がある。液体人間の液体としての性質から「アメーバーのように自分自身の輪郭をたもつことができた」とや「液体人間同志や、他の天然の液体の中に一度完全に混和したあと」「また元どおりの量をたもつて分離」できることを考えると、個々の液体人間の区別が液体人間同士にもあることが予想できる。これをもとにすると、液体人間たちの様々な行動は個々の液体人間の意思によるものであり、集団で洪水となり富める人々を溺死させた行動は、液体人間たちの意思の一致によるものと考えられる。

三、経験と法則を破壊する洪水

液体人間による影響は様々なところに及んだが「とりわけ重大なものとして「まだ液化していない、特に富める人々たちに対する作用」が挙げられている。ここで「とりわけ重大」で「特に」問題として強調されることによって、液化した「貧しい人々」と液化しな

かった「富めるたち」との対立という構図が明確に浮かび上がり、その視点から物語が語られていくのである。

「富める人たち」として最初に挙げられるのは「大王場主」や「ある政府の高官」「老婦人」などである。液体人間が混入した少量の水によって溺死する、という事件がいくつも起り、それを聞いた人々は恐水症にかかった。恐水症は一九五〇年当時問題となっていた狂犬病の発病によって発症する症状である。「狂犬病予防菌はなんら効力を示さなかつた」とあるように、恐水症は狂犬病によって起るといふ既存概念がここでもまた破壊されている。

人間液化や洪水の様子が人々にどう伝わっていたのか、新聞記事の内容がたびたび取り上げられている。最初は刑務所の囚人たちの逃亡事件や農民の液化による小洪水を報じていたが、液化が世界中に拡がってからは、大洪水の到来を否定しようとするような記事を出している。

一、この一年間、世界各地の雨量分布ならびにその総計は例年の平均を下回っていること。

一、増水をつたえられる河川すべて、単に例年の季節的変化の範囲を出ていないこと。

一、その他いかなる気象上、地質上の変化も認められぬこと。それは事実であつた。(略)やがて新聞も洪水の事実を認めざるをえなくなつてきた。しかし相変わらず樂觀的な調子で、これはどこかの天体異変によるものであり、一時的なものにすぎず、間もなく自然に終息するであろうと繰り返した。

一時は洪水の到来を否定しようとした新聞は、気象上の事実を伝

え自然災害である洪水が起る原因がないことを記事に書いた。しかし、事実洪水が起っていることを認めざるを得なくなると、「どこかの天体異変によるもの」で「一時的なもの」と伝えている。その後も、洪水が収まることはなく、生き残った人々は高所へ避難し堤防を築くことで身を守ろうとした。堤防を築くために声明が出され、新聞は「急に態度を変え、その声明に合わせてその義務と正義をうた」う記事を出した。これまでの新聞の描かれ方からわかるのは、新聞が事実や起つた出来事を伝える存在であることと、堤防を築くことにした「国王や元首たち」といった「富める人たち」側に都合のいい内容を伝える、広報のような役割を果たしていることである。堤防の構築過程にも液化は続き「市民の行方不明を告げる記事」が出されるが、洪水や液化との関係には触れず「単に結果として」扱われ、「洪水のもつ矛盾した性格や、その本質的な原因」が新聞記事となることはなかつた。これは、先に述べた法則をさぐる哲学者の姿と対比して描かれている。哲学者は液化の様子を観察することで、その法則に気付き大洪水の到来を予言するが、新聞は洪水の原因を伝えることができない。洪水の原因について新聞が「固く口を閉ざしたまま決してふれようとしなかつた」のは、過去の経験や既存概念をもとにした結果や真実を伝える「性格」であるために、それらに当てはまらない新たな性質の液体による洪水の原因を把握することができないからである。これは、この洪水が過去に起つた自然災害としての洪水とは性質が異なるものであることが暗示されていると言える。

止まらない液化と洪水で世界が不安と苦悩に覆われる中、「平然

とたのしんでいるもの」としてノアが登場する。ノアには「前の大洪水の経験」があり、前回と同じく方舟を制作し難を逃れようとしていた。初出時の末尾に「エデンの寓話より」とあり「三つの寓話」はそれぞれ聖書のモチーフが作中に描き込まれている。先行論で指摘があるように、本作品は『旧約聖書』創世記六章から九章に登場するノアの方舟をもとに「第二の洪水」の発生を描いている。この聖書のノアの方舟をもとにした作品で、本作品との関連が指摘されるものにシユベルヴィエル「ノアの方舟」（堀口大学訳、一九三九年、第一書房）がある。飯島耕一はシユベルヴィエルと安部の類似に触れ、安部を「コミュニストになったシユベルヴィエル」^①と評している。さらに飯島の論を受け李先胤は本作品とシユベルヴィエル「ノアの方舟」との具体的な比較を試みている。確かに、シユベルヴィエルの作品では少女の全身が涙に変わるなど、人間液化と自然災害ではない洪水の発生という類似が見られる。しかし、「ノアの方舟」では主に方舟への乗船者の選定の様子や方舟での生活に描写の多くがあたりられていることから、内容の類似というよりは、飯島が指摘するような変身譚としての類似という性格が強いと考えられる。聖書における洪水は「諸の人の末期をわが前に近づけり其は彼等のために暴虐世にみつればなり」として地上に増えた悪を排除するために神が起こしたものであり、この最初の洪水によってノアは神の命令で方舟をつくり、洪水から生き延びることができた。ノアが経験的に知っていた洪水の対処法こそが方舟なのである。しかし、二度目の洪水では方舟に液体が入り込み、ノアも溺死してしまふ。

たちまち液体人間が船べりを逼り上ろうとした。ノアは大声で

いつたした。

「おい、誰の舟だと思っているんだ。おれはノアだよ。そしてこれはノアの方舟だ。間違えちやいけぬ。さあ、出て行つてくれ！」

しかし、もはや人間でない液体に、ノアの言葉が分るだろうと考えたのは、明らかに彼の早計であり、計算ちがいだつた。液体には液体の問題があるだけだ。そして次の瞬間、方舟は液体で満され、生物たちは溺死していった。

ノアの立場から見れば、自身が前回の洪水を生き延びたのと同様に、今回の洪水も方舟によって生き延びるはずであった。しかし、「液体には液体の問題があるだけ」でノアの言葉は聞き入れられない。神の意思によって洪水を生き延びるはずであったノアの溺死は、液体人間による洪水が神の意思の及ばないものであることを示している。

以上のように、人間の液化と液体人間による洪水は、既存の法則や常識、秩序といったものを破壊しながら人々を溺死させ、最後には人類を絶滅させてしまふ。この洪水は確かに共産主義的な性質が認められる。しかし、溺死する人々が資本家といった「富める人たち」だけでなく最後には人類が絶滅してしまうことや、社会秩序だけでなく自然法則まで破壊してしまうことをあわせると、洪水には共産主義的な革命以上の寓意が含まれていると考えられる。

四、液化の原因と「洪水」の寓意

ここからは、人々が液化した原因と本作品の寓意を同時代的な背景と重ね合わせながら考えていきたい。最初に目撃され液化した労働者について、「彼は今工場からの帰りで、疲労のほかに頭の中はからつぽだつた」というように液化前の状態が書かれている。労働による疲労は、資本主義社会の問題点を明示する描写である。このような社会と人の関わりについて安部が触れている文章に、「シュールリアリズム批判」がある。

本作品の発表当時、共産主義に関心を寄せるとともにアヴァンギャルド芸術運動に関わっていた安部は、「シュールリアリズム批判」でシュールリアリズムを「現実認識そのものをテーマとして取上げた」芸術であり「現実を否定すると同時に再構築しようとした革命理論」であると定義し、意識と無意識を社会的現実と照らし合わせながら「シュールリアリストが深層作用を主張し、狂人のイマジジュを画いた社会的必然性」を次のように説明している。

意識は絶えず無意識界の作用を検閲し、その表出された質が無害であるときにだけ表出を許すが、さもない場合はそれを変質あるいは抑圧しようとする。その選択性は社会的関連に於て捉えられなければならない。(略)ところで第二系と第一系、すなわち意識と無意識界とは無関係に成立したのではない。始めは外界に対して極めて合理的な筈であった。しかし、社会的現実には常にその関係に対して合理性を保つように動いていきはし

なかつた。神経の型による個人差を超えた抵抗(内的軋轢)が現れてくることがあつた。大多数の人間(民衆)がその抵抗を共通の社会的現実として受取らざるを得ない時があつた。例えば自律的経済である資本主義の下にある民衆の社会的現実のごとく。そして、その意識と無意識とのアンバランスが、我我を取まく様々な現象なのである。抑圧階級の圧制が意識では検閲し切れないほどの刺戟を無意識界に与えた場合、バランスはついに破れる。精神深層作用は露呈あるいは爆発せざるを得ない。従つてブルジョア道徳はこの深層作用を反社会性と呼び、その発露を恥ずべきものとして極力抑圧しようとするが、しかし逆に(ある特定の)社会の反深層作用性と考える力がむしろ妥当ではないだろうか。むしろ深層作用そのものは極めて個人的・非社会的であるにしても、決して反社会的であるわけはなく、上層作用(意識作用)とのバランスに於て充分社会の中に安定しうる筈のものである。事実すべてのプシコノイローゼは刺戟から脱し、バランスを取戻せば直ちに異常反応を中止する。

安部はここで「社会的現実」のために「意識と無意識のアンバランス」が生まれ、このバランスが「意識では検閲しきれないほどの刺戟」によつて壊れると、「精神深層作用」が「露呈あるいは爆発」するといふ。これを見ると、社会的現実の影響を受ける「意識」と個人的な深層作用である「無意識」のバランスを崩してしまう社会的現実の一例として資本主義が挙げられている。資本主義下における民衆の精神深層作用の露呈とは、労働の放棄や革命といった共産主義的な階級闘争が予想されるが、この資本主義の例はあくまでも

社会的現実の一例であり、資本主義以外の様々な社会的現実に当てはめ得る関係を、安部は論じているのである。安部はさらに精神深層作用の露呈を誘発する社会の「反深層作用性」を問題とする。人々の欲望といった「無意識」を「露呈あるいは爆発」させるほどに過剰な抑圧を与えてしまう社会の在り方に疑問を投げかけている。

ここで「洪水」の人々の液化に戻ろう。安部が「シュールリアリズム批判」で論じた人々の深層作用と社会的現実の間係をもとに考えると、液化は社会的現実に対する深層作用の露呈であると考えられる。哲学者が発見した労働者は「頭がからつぽ」であるために、意識による無意識の検閲が行えない状態である。無意識への何らかの刺激によって、人々の無意識が液化という形で露呈したのではないだろうか。労働者が労働によって「頭がからつぽ」になってしまったように、人々が液化せざるを得ない社会的現実こそがこの洪水の「本質的な原因」だったのである。こうして液化した液体人間たちが様々な行動をとり、それまでの常識や法則を破壊していく姿は、奔放で多様である。無意識の露呈によって液化した人々は、社会的現実の破壊を通して「意識作用」とのバランスを取り戻す中で主体性といえるものを獲得していく。その様子は多様な行動をとる液体人間の個々の運動の他に、同時代評において「苦言」^⑩を呈された「液体人間に対する堤防など量子力学に対するニュートン力学にすぎず」という洪水の描写からもわかる。この描写は次のような背景から、液体人間たちが個々に主体性を得た存在であることを暗示していると考えられる。

戦後、社会的・思想的に共通した問題として「民主主義革命の推

進、封建的・前近代的な因襲や束縛からの個人の解放」があり、民主主義革命が占領という外からの力によって成されたため「社会的・制度的な変革を支える主体的・人間的な条件の立ちおくれ、主体の内部における弱さ」^⑪が問題となった。また、日本国憲法の制定によって国民が主権者となったため「日本の運命をゆだねられた国民がみずからをどのような主体として形成していくか」が課題となっていた。このような背景をもとに敗戦直後の時期に主体性が議論されていた。「因襲や束縛からの個人の解放」という実存主義的な問題としての主体性や、「民主主義革命」の語からもわかるように共産主義における主体性が問題となる一方で、「主体性」という言葉そのものに対する議論が広く起こった。このような主体性論争の議論の一つに、清水幾太郎を中心に発足した二十世紀研究所が行った座談会がある。この中で、物理学者の渡辺慧は「芸術のみならず科学その他の分野において二十世紀に「主体的」というか或は主観的というか、ともかくそういう傾向」が現れたとして、芸術については「いろいろなものをわれわれものを見る人の頭の枠に当てはめてみるという意味において、非常に主観的」なキュビズムや「外にある客観的な誰にも共通な絶対的なものを描くのではなく、われわれの心にあるものを描く」シュルレアリスムを挙げ、「より真実なものを捉えようという目的で一回主観にもどる傾向」があると指摘する。物理でも「同じことが全くパラレルに行われている」として、相対論や量子論が出たことで古典物理学が「破れてきた」と指摘する。「見るもの立場によって物の長さが違ってくる」相対論や「観測者が観測するしないによってさえ実在が変つてくる」量子論が主

体的傾向を持つのは「十九世紀的な意味のリアルとはむしろ逆の真にリアルなものが捉えられてきたことにほかならない」と論じている。

これを見ると、同時代の主体論争の中で芸術や科学の主体性までもが論点となっていたことがわかる。さらに、安部が関心を持っていたシュルレアリスムや、「洪水」の比喩として使われている量子力学を含む量子論が、主観的なものとして扱われていることは興味深い。相対論や量子論の出現によって「破れてきた」とされる古典物理学は、「液体人間に対する堤防など量子力学に対するニュートン力学にすぎ」ないとする堤防の比喩と重なる。個々に主体性を獲得した液体人間たちの集団によって生み出された洪水は、それまでの液体ならば越えることがないはずの堤防を這い上がり、人々を溺死させた。この堤防の比喩は、それまでの液体や堤防の観念が覆される様子と同時に、主体的なものが新たな現実を創り出す様子を示唆しているのである。

人々の無意識の発露によって液化した液体人間たちは、個々に主体性を獲得すると同時に集団となって洪水を起こした。この洪水が常識、秩序、法則や社会的現実を破壊し、人類を絶滅させることで、主体性を獲得した人々による集団の力の大きさが描かれている。また、主体性を得た人々の洪水によって新たな現実が生み出されることが本作品の結末に描かれる。洪水で人々が溺死した後、次のように締めくくられている。

こうして第二の洪水で人類は絶滅した。だがしかし、すでに静まった水底の町や村の、街角や木陰や窓ぎわをのぞきこんで

みると、何やらきらめく物質が結晶しはじめているのだつた。多分過飽和な液体人間たちの中の目に見えない心臓を中心にして。

洪水は最後には静まり、液体人間たちの心臓を中心に物質が結晶している。無意識の発露によって液化した液体人間たちは、様々な行動を取る中で主体性を獲得し、洪水となって常識や法則、社会を破壊した。安部が「シュルレアリスム批判」で示した意識と無意識のアンバランスは、人類が滅亡し社会的現実が破壊されることによって解消され、バランスは元に戻った。そのために洪水は静まったのである。それまでの社会的現実のために液化し過分に水に溶けてしまった人々の無意識は、新たな社会的現実やそれに対する意識とのバランスを取るために、感情や無意識を象徴するであろう心臓を核にして結晶化した。この結晶は液化という「異常反応」の終了を示すとともに、新たな社会的現実の到来を暗示している。

五、おわりに

人々が液化することで起こった洪水は、人類が滅亡し新たな社会的現実の到来を予感させた。これだけを見ると、やはり共産主義的な革命が想起されるが、液化の様子や液体人間たちの行動を見ていくと、様々な背景によって液化し、各々に行動することで主体性を獲得する個人の存在が見えてくる。同時代の主体性論争などを背景に、個人の在り方や社会との関わりを寓意的に描き、主体性を獲得した人々が新たな社会的現実を創り出す様子が示されている。これ

まで共産主義的解釈が大半を占めた本作品だが、人々の液化と液体人間の行動に着目しながら主体性の問題を介して読解することで、共産主義的な問題以外にも、実存主義的な問題ないしは実存主義と共産主義に通底する問題が本作品に描き込まれた可能性が見えてくる。本作品は確かに共産主義的な側面が多分にあるが、安部自身のシュルレアリスム受容をもとに個々人の露呈した無意識の「異常反応」とその停止を、液体人間の洪水によって描いた作品といえよう。

注

- (1) 北村耕「壁の中の実存と転向(上)」——安部公房の世界——(『民主文学』一九六七年一月)
- (2) 田中裕之「比喩と変形——安部公房の変形譚について——」(『梅花女子大学文学部紀要 比較文化編』二〇〇三年二月)
- (3) 李先胤「水の表象と暴力批判——安部公房における科学的認識と文学——」(『東京大学博士(学術)学位論文』二〇一一年)
- (4) 石上玄一郎、高見順、河上徹太郎「小説月評」(『文学界』一九五一年一月)
- (5) 渡辺広士『安部公房』(一九七六年九月十八日、審美社)
- (6) 玉川晶子「安部公房『壁』について——第三部「赤い繭」論——」(『言文』二〇〇三年三月)
- (7) 前掲注(3)に同じ。
- (8) 前掲注(4)に同じ。
- (9) 『理科学典』(一九五〇年二月二十五日、平凡社)の「液体」の項では、液体ヘリウムは温度によって性質が異なりヘリウムIとヘリウ

ムIIに分けられることが説明され、液体ヘリウムIIに関しては「ヘリウムIIは実にふしぎな性質をもった液体である。オネネスは空の容器の底だけを液体ヘリウムIIにひたすと、ただそれだけで容器の中にヘリウムIIが入ってくる現象をみとめた。これはヘリウムIIがうすいまくのような流れとなつて容器のかべをはいのぼりはいおりに容器の中に入るからであることが多くの実験家によつて説明された。」という記述が確認できる。

(10) 恐水症の症状については美甘義夫「狂犬病」(『看護学雑誌』一九五〇年四月)に「飲ものを飲もうとする時に、咽の嚥下筋が痛みを伴つた痙攣を起し、飲込むことができない。その恐怖や苦痛の様は独特なものである。これが進むと水を見たり水の音を聞いたり又水や飲物の話を聞く丈で、咽ばかりではなく全身も痙攣する様になり、その恐怖と苦痛から極度に水を恐れる。」とある。

(11) 狂犬病が蔓延し多数の死者が出たことから、厚生省が畜犬の狂犬病予防接種を義務化する法案を作成したことが「読売新聞」一九五〇年七月二七日朝刊の「未登録には体刑 増える狂犬・予防法案ができる」という記事で確認できる。

(12) 前掲注(6)に同じ。

(13) 飯島耕一「安部公房——あるいは無罪の文学——」(『日本文学研究資料叢書・安部公房・大江健三郎』一九七四年五月二〇日、有精堂出版)

(14) 『旧新約聖書 引照附』(一九三七年十月、日本聖書協会)

(15) 安部公房「シュルレアリスム批判」(『みずゑ』一九四九年八月)

(16) 前掲注(4)に同じ。前掲注(4)では「科学的な智識」が「こ

の作家の新しさの一つ」としたうえで、これが「何とも素朴」と苦言を呈している。具体的には、「低い方から高い方へ逆流する」液体の性質が液体ヘリウムⅡの性質である点と、「液体人間に対する堤防など量子力学に対するニュートン力学にすぎず」という文について、量子力学とニュートン力学の二つは「microscopic な世界と macroscopic な世界の相違なので対立するものではない」という点である。

〔17〕 古田光「主体性論争（上）——文学上の論争から哲学上の論争へ」（『現代と思想』一九七三年九月）

〔18〕 山田洸『戦後思想史』（一九八九年六月一日、青木書店）

〔19〕 二十世紀研究所『唯物史観研究 第二集 主体性・主体的立場』（一九四八年一月三〇日、白日書院）

【付記】安部公房「洪水」「シニョールリズム批判」の本文の引用と傍点は初出に拠り、旧字は新字に改めた。